

## 第1章 法律の概要

## 1 法律の目的等

### (1) 法律の目的

特定非営利活動促進法（以下「法」といいます。）は、特定非営利活動（法第2条第1項に規定する特定非営利活動をいいます。以下同じ。）を行う団体に法人格を付与すること並びに運営組織及び事業活動が適正であって公益の増進に資する特定非営利活動法人（以下「NPO法人」といいます。）の認定に係る制度を設けること等により、ボランティア活動をはじめとする市民が行う自由な社会貢献活動としての特定非営利活動の健全な発展を促進し、もって公益の増進に寄与することを目的としています（法1）。

### (2) NPO法人になるための基準

この法律に基づいて、NPO法人になれる団体は、次のような基準に適合することが必要です（法2②、法12①）。

- ア 特定非営利活動を行うことを主たる目的とすること（法2②）
- イ 営利を目的としないものであること（利益を社員で分配しないこと）（法2②一）
- ウ 社員の資格の得喪に関して、不当な条件を付さないこと（法2②一イ）
- エ 役員のうち報酬を受ける者の数が、役員総数の3分の1以下であること（法2②一ロ）
- オ 宗教活動や政治活動を主たる目的とするものでないこと（法2②二イ・ロ）
- カ 特定の公職者（候補者を含む）又は政党を推薦、支持、反対することを目的とするものでないこと（法2②二ハ）
- キ 暴力団でないこと、暴力団又は暴力団の構成員等の統制の下にある団体でないこと（法12①三）
- ク 10人以上の社員を有するものであること（法12①四）

## 2 NPO法人設立の手續

NPO法人を設立するためには、法律に定められた書類を添付した申請書を、所轄庁に提出し、設立の認証を受けることが必要です（法10①）。提出された書類の一部は、受理した日から2箇月間、公衆の縦覧に供することとなります（法10②）。

京都府においては、京都府庁及び事務所の所在する地域を所管する広域振興局（手引き裏面参照）で縦覧されます。

所轄庁は、申請書の受理後4箇月以内に認証又は不認証の決定を行います（法12②）。設立の認証後、登記することにより法人として成立することになります（法13①）。

（注1）申請書に添付する書類は①～⑩となります。なお、①、②、⑦、⑨及び⑩は、公衆の縦覧に供する書類に該当します。

- ① 定款
- ② 役員名簿（役員の名及び住所又は居所並びに各役員についての報酬の有無を記載した名簿）
- ③ 役員の見任承諾及び誓約書の謄本
- ④ 住所又は居所を証する書面
- ⑤ 社員のうち10人以上の者の名簿
- ⑥ 上記1の(2)のオ・カ・キに該当することを確認したことを示す書面
- ⑦ 設立趣旨書
- ⑧ 設立についての意思の決定を証する議事録の謄本
- ⑨ 設立当初の事業年度及び翌事業年度の事業計画書
- ⑩ 設立当初の事業年度及び翌事業年度の活動予算書（当分の間、収支予算書によ

る提出も可。以下同じ。)

(注2) NPO法人の所轄庁は、その主たる事務所の所在する都道府県の知事(その事務所が一の指定都市の区域内のみに所在する場合は、当該指定都市の長)となります(法9)。

### 3 NPO法人の管理・運営

NPO法人は、法の定めにしたがって適切な管理・運営を行わなければなりません。NPO法人の管理・運営を行うにあたっては、特に次の点にはご注意ください。

#### ① 役員

NPO法人には、理事3人以上及び監事1人以上を置かなければなりません。理事は法人を代表<sup>(注1)</sup>し、その過半数<sup>(注2)</sup>をもって業務を決定します。役員の変更等があった場合は、所轄庁に届け出ることが必要となります。なお、役員は暴力団の構成員等はないなどの欠格事由のほか、親族の数、報酬を受ける者の数等に制限が設けられています(法15~24)。

(注1) 定款をもって、その代表権を制限することができます。

(注2) 定款において特別の定めを置くことができます。

#### ② 総会

NPO法人は、毎事業年度少なくとも1回、通常総会を開催しなければなりません(法14の2)。

#### ③ その他の事業

NPO法人は、特定非営利活動に係る事業に支障がない限り、特定非営利活動以外の事業(以下「その他の事業」といいます。)を行うことができます。その他の事業で利益を生じた場合は、その利益を特定非営利活動に係る事業のために使用しなければなりません。また、その他の事業に関する会計を特定非営利活動に係る会計から区分しなければなりません(法5)。

#### ④ 事業報告書等

毎事業年度初めの3箇月以内に、前事業年度の事業報告書、計算書類(活動計算書(当分の間、収支計算書による提出も可。以下同じ。)、貸借対照表)、財産目録などを作成し、すべての事務所に備え置くとともに、所轄庁に提出することが必要です。法人の会計については、正規の簿記の原則に従って会計簿を記帳するなど、法第27条に定められた原則に従い会計処理を行わなければなりません(法27~29)。

#### ⑤ 定款変更

定款を変更するためには、総会の議決を経た上で、下記①~⑩に関する事項について変更を行う場合には、所轄庁の認証が必要です(法25③④)。

下記①~⑩に関する事項以外の定款の変更については、所轄庁の認証は不要です。なお、この場合にも、定款変更後に所轄庁に届け出ることが必要となります(法25⑥)。

(注) 定款の変更にあたり所轄庁の認証が必要となるのは、以下の①~⑩に関する事項となります。

① 目的

② 名称

③ その行う特定非営利活動の種類及び当該特定非営利活動に係る事業の種類

④ 主たる事務所及びその他の事務所の所在地(所轄庁の変更を伴うものに限ります。)

⑤ 社員の資格の得喪に関する事項

⑥ 役員に関する事項(役員の定数に係るものを除きます。)

⑦ 会議に関する事項

⑧ その他の事業を行う場合における、その種類その他当該その他の事業に関する事項

⑨ 解散に関する事項（残余財産の帰属すべき者に係るものに限ります。）

⑩ 定款の変更に関する事項

#### ⑥ 合併、解散

NPO法人は、総会での議決・所轄庁の認証等の一定の手続きを経て、別のNPO法人との合併又は解散を行うことができます（法11③）。NPO法人が解散する場合、残余財産は、定款で定めた者に帰属しますが、その定めがない場合は、国又は地方公共団体に譲渡するか、最終的には、国庫に帰属することとなります（法31～39）。

（注）定款で定めることができる残余財産の帰属すべき者は、①～⑥に掲げる者のうちから選定されなければなりません（法11③）。

- ① 他の特定非営利活動法人
- ② 国又は地方公共団体
- ③ 公益社団法人、公益財団法人
- ④ 学校法人
- ⑤ 社会福祉法人
- ⑥ 更生保護法人

#### ⑦ 監督等

所轄庁は、法令違反等一定の場合に、NPO法人に対して、報告を求めたり、検査を実施し、また、場合によっては、改善措置を求めたり、設立認証を取り消すことができます。また、法に違反した場合には、罰則が適用されることがあります（法41～43、77～81）。

## 4 NPO法人格取得後の義務

法人格取得後は、法及びその他の法令並びに定款の定めにしたがって活動しなければなりません。特に次の点にはご注意ください。

### (1) 事業報告書等の情報公開と所轄庁への提出

法人は、毎事業年度初めの3箇月以内に、前事業年度の事業報告書等を作成しなければなりません。また、これらの書類は、役員名簿及び定款等と併せてすべての事務所に備え置き、社員及び利害関係人に閲覧させるとともに、所轄庁に提出し、一般公開されることとなります（法28～30）。

（注）閲覧される書類は①～⑨となります。

- ① 事業報告書
- ② 貸借対照表
- ③ 活動計算書
- ④ 財産目録
- ⑤ 年間役員名簿（前事業年度において役員であった者の氏名及び住所又は居所並びに各役員についての報酬の有無を記載した名簿）
- ⑥ 社員のうち10人以上の者の名簿
- ⑦ 役員名簿
- ⑧ 定款
- ⑨ 認証・登記に関する書類の写し

## (2) 納税

法人に対しては、いろいろな税金が課せられます。ここでは、一部例を挙げて説明しますが、詳細については、国税についてはお近くの税務署、府税については府税事務所又は広域振興局税務室、府庁税務課、市町村税については各市町村の税担当窓口にご相談ください。

国税である法人税については、法人税法に規定された「収益事業」(その性質上その事業に附随して行われる行為を含みます。)から生じる所得に対して課税されることとなります。

地方税(法人住民税(法人税割)及び事業税)も、収益事業から生じた所得に対して課税されます。また、法人住民税(均等割)は、所得の有無にかかわらず原則として課税されます。

(注1) 法人税法上の収益事業は、物品販売業等の下記に掲げられる事業で、継続して事業場を設けて行われるものをいいます(法人法2十三、法人令5①)。

物品販売業、不動産販売業、金銭貸付業、物品貸付業、不動産貸付業、製造業、通信業、運送業、倉庫業、請負業、印刷業、出版業、写真業、席貸業、旅館業、料理店業その他の飲食店業、周旋業、代理業、仲立業、問屋業、鉱業、土石採取業、浴場業、理容業、美容業、興行業、遊技所業、遊覧所業、医療保健業、一定の技芸教授業、駐車場業、信用保証業、無体財産権の提供等を行う事業、労働者派遣業

(注2) 特定非営利活動に係る事業であっても、上記(注1)に掲げる事業に該当する場合には、当該事業から生ずる所得については法人税が課税されます。

## (3) NPO法人に対する府税の優遇措置について

京都府では、特定非営利活動法人に対し、次のとおり府税の優遇措置を行っています。

### I 優遇措置の内容

#### ① 府民税の均等割の課税免除

法人税法上の収益事業を行わないNPO法人については、当該事業年度分の法人府民税の均等割を免除します。(この場合、免除に関する申請等の手続きは不要です。)

また、法人税法上の収益事業を行うNPO法人について、次の〈1〉～〈4〉の要件のいずれかに該当する事業年度分の法人府民税の均等割を免除します。

〈1〉 法人設立の日から3年以内に終了する各事業年度のうち、当該収益事業に係る所得の計算上益金の額が損金の額を超えない事業年度(赤字事業年度)

〈2〉 平成26年3月31日までに開始する各事業年度のうち、前年度と比較して府内における常用雇用の総数が増加した事業年度

〈3〉 平成22年4月1日から平成26年3月31日までに開始する各事業年度のうち、府内における常用雇用の総数が前年度と同数かつ当該事業年度の総収入金額(\*)が前事業年度の総収入金額未満である事業年度(\*総収入金額は、①会費・入会金 ②事業に伴う収入 ③寄附金・補助金 ④利息・配当金が対象となります。)

〈4〉 平成26年3月31日までに開始する各事業年度のうち、設立後最初の事業年度で当該事業年度末日に常用雇用者がいる場合

※ 実施している事業が法人税法上の収益事業に該当するか否かは、所轄の税務署等

に御確認ください。なお、収益事業に該当する場合は、所管の府税事務所又は府広域振興局税務室、府庁税務課への届出も必要となりますのでご注意ください。

## ② 不動産取得税及び自動車取得税の課税免除

次のア～ウの要件の全てに該当する場合は、不動産取得税及び自動車取得税を免除します。

ア 法人成立の日から3年以内に取得したもの

イ 定款に定められた特定非営利活動に係る事業の用に供するもの

ウ 無償（寄附、贈与など）で譲り受けたもの

※ 当該不動産又は自動車は譲渡者が所有していたものであることが必要です。

## II 免除手続

優遇措置の適用を受けるためには、以下のとおり課税免除の適用申請等を行う必要があります。（申請書の様式は京都府のホームページ（アドレスは手引書表紙に記載してあります）からダウンロードできます。）

### 1 府民税の均等割の課税免除

〈1〉課税免除を受けようとする事業年度終了後申告期限の30日前までに課税免除適用申請書（様式は100、101ページ参照）を、京都府庁又は事務所の所在する地域を所管する広域振興局（※手引裏面参照）へ提出してください。添付書類は次のとおりです。

●定款の写し、調査等依頼書（様式は102ページ参照）、常用雇用者一覧表（常用雇用者の維持・増加による課税免除を受けようとする場合。様式は103ページ参照）、当該事業年度及び前事業年度の収支計算書及び総収入金額に関する書類（常用雇用者の維持による課税免除を受けようとする場合。様式は104ページ参照）

\*なお、常用雇用者の維持又は増加による課税免除を申請する場合は、申請時に給与台帳等常用雇用者の維持又は増加が確認できる書類を提示してください。

〈2〉対象と認められる場合、その旨の書面を交付しますので、申告期限の日までにその書面を添付して、所管の府税事務所又は広域振興局税務室・府庁税務課に申告を行ってください。

### ② 不動産取得税の課税免除

〈1〉不動産を取得した日から当該不動産に係る不動産取得税の納期限の14日前までに課税免除適用申請書を、京都府庁又は事務所の所在する地域を所管する広域振興局（※手引裏面参照）へ提出してください。（添付書類：無償譲渡確認書、定款の写し、不動産の登記簿謄本、位置図、建物平面図（家屋の場合）、調査等依頼書）

〈2〉対象と認められる場合、その旨の書面を交付しますので、その書面を不動産取得税の納期限の日までに、所管の府税事務所又は広域振興局税務室に提出してください。

### ③ 自動車取得税の課税免除

〈1〉自動車を取得しようとする日の14日前までに課税免除適用申請書を、京都府

庁又は事務所の所在する地域を所管する広域振興局（※手引裏面参照）へ提出してください。（添付書類：無償譲渡確認書、定款の写し、自動車の写真、調査等依頼書）

- 〈2〉対象と認められる場合、その旨の書面を交付しますので、その書面を自動車取得税の申告書に添付して、自動車税管理事務所に申告してください。（書面の交付日から2箇月以内に申告を行わない場合、再申請が必要になりますのでご注意ください。）

※ いずれの税目についても、定められた時期までに申請及び申告等を行わなかった場合及び以下の場合については、課税免除は適用されませんのでご注意ください。

- 1 府税を滞納しているとき
- 2 過去3年間に府民税の申告を行わなかったため、税額の決定を受けているとき
- 3 過去3年間に重加算税の賦課や重加算金の決定を受けているとき
- 4 過去3年間に特定非営利活動促進法に基づく改善命令を受けているとき
- 5 虚偽申請を行ったとき

## 5 認定 NPO 法人制度の概要

認定 NPO 法人制度は、NPO 法人への寄附を促すことにより、NPO 法人の活動を支援するために税制上設けられた措置として、NPO 法人のうち一定の要件を満たすものについて、これまで、国税庁長官が認定を行う制度でしたが、平成23年の法改正により、所轄庁が認定を行う新たな認定制度が創設され、平成24年4月1日から実施されるものです。

### (1) 認定 NPO 法人とは

認定 NPO 法人とは、NPO 法人のうちその運営組織及び事業活動が適正であって公益の増進に資するものにつき一定の基準（パブリック・サポート・テストを含みます。）に適合したものとして、所轄庁の認定を受けた NPO 法人をいいます（法2③、44①）。

### (2) 仮認定 NPO 法人とは

仮認定 NPO 法人とは、NPO 法人であって新たに設立されたもの（設立後5年以内のものをいいます。ただし、平成27年3月31日までは、設立後5年を超えた NPO 法人も申請をすることができます。）のうち、その運営組織及び事業活動が適正であって特定非営利活動の健全な発展の基盤を有し公益の増進に資すると見込まれるものにつき一定の基準（パブリック・サポート・テストは含まれません。）に適合したものとして、所轄庁の仮認定を受けた NPO 法人をいいます（法2④、58①）。

### (3) 認定 NPO 法人等になることによるメリット

#### ① 寄附者に対する税制上の措置

##### イ 個人が寄附した場合

個人が認定 NPO 法人等に対し、その認定 NPO 法人等の行う特定非営利活動に係る事業に関連する寄附をした場合には、特定寄附金に該当し、寄附金控除（所得控除）又は税額控除のいずれかの控除を選択適用できます（措法41の18の2①②）。また、都道府県又は市区町村が条例で指定した認定 NPO 法人等に個人が寄附した場合、個人住民税（地方税）の計算において、寄附金税額控除が適用されます（地

方税法37の2①三・四、314の7①三・四)。

ロ 法人が寄附した場合

法人が認定NPO法人等に対し、その認定NPO法人等の行う特定非営利活動に係る事業に関連する寄附をした場合は、一般寄附金の損金算入限度額とは別に、特定公益増進法人に対する寄附金の額と合わせて、特別損金算入限度額の範囲内で損金算入が認められます(措法66の11の2②)。

ハ 相続人等が相続財産等を寄附した場合

相続又は遺贈により財産を取得した者が、その取得した財産を相続税の申告期限までに認定NPO法人(仮認定NPO法人は適用されません。)に対し、その認定NPO法人が行う特定非営利活動に係る事業に関連する寄附をした場合、その寄附をした財産の価額は相続税の課税価格の計算の基礎に算入されません(措法70⑩)。

② 認定NPO法人のみなし寄附金制度

認定NPO法人が、その収益事業に属する資産のうちからその収益事業以外の事業で特定非営利活動に係る事業に支出した金額は、その収益事業に係る寄附金の額とみなされ、一定の範囲内で損金算入が認められます(仮認定NPO法人は適用されません。措法66の11の2①)。

(4) 認定の基準

認定NPO法人等になるためには、次の基準に適合する必要があります(法45、59)。

① パブリック・サポート・テスト(PST)に適合すること(仮認定NPO法人は除きます)。

② 事業活動において、共益的な活動の占める割合が、50%未満であること。

③ 運営組織及び経理が適切であること。

④ 事業活動の内容が適正であること。

⑤ 情報公開を適切に行っていること。

⑥ 事業報告書等を所轄庁に提出していること

⑦ 法令違反、不正の行為、公益に反する事実等がないこと。

⑧ 設立の日から1年を超える期間が経過していること。

(注) 上記①～⑧の基準を満たしていても(仮認定NPO法人は①を除きます)、欠格事由(法47)に該当するNPO法人は、認定(仮認定)受けることはできないこととなります。

(5) 欠格事由

次のいずれかの欠格事由に該当するNPO法人は認定等を受けることができません(法47)。

① 役員の中に、次のいずれかに該当する者がある法人

イ 認定又は仮認定を取り消された法人において、その取消しの原因となった事実があった日以前1年以内に当該法人のその業務を行う理事であった者でその取消しの日から5年を経過しない者

ロ 禁錮以上の刑に処せられ、その執行を終わった日又はその執行を受けることがなくなった日から5年を経過しない者

ハ NPO法、暴力団員不当行為防止法に違反したことにより、若しくは刑法204条等若しくは暴力行為等処罰法の罪を犯したことにより、又は国税若しくは地方税に関する法律に違反したことにより、罰金刑に処せられ、その執行を終わった日又はその執行を受けることがなくなった日から5年を経過しない者

ニ 暴力団又はその構成員等



- ② 認定又は仮認定を取り消され、その取消しの日から5年を経過しない法人
- ③ 定款又は事業計画書の内容が法令等に違反している法人
- ④ 国税又は地方税の滞納処分が執行されている又は当該滞納処分の終了の日から3年を経過しない法人
- ⑤ 国税又は地方税に係る重加算税等を課された日から3年を経過しない法人
- ⑥ 暴力団、又は、暴力団若しくは暴力団の構成員等の統制下にある法人

(6) 認定等の有効期間等

認定の有効期間は、所轄庁による認定の日から起算して5年となります（法51①）。

仮認定の有効期間は、所轄庁による仮認定の日から起算して3年となります（法60）。

なお、認定の有効期間の満了後、引き続き、認定NPO法人として特定非営利活動を行おうとする認定NPO法人は、その有効期間の更新を受ける必要があります（仮認定の有効期間の更新はありません。）（法51②）。